

# 朝日新聞に見る五輪報道の変容

## Changing coverage of the Olympics in the Asahi Newspaper

1K06A0198

指導教員 主査 リー・トンプソン先生

石川 祥子

副査 宮内孝知先生

### 【目的】

オリンピック。それは「スポーツと平和の祭典」という高邁な理想の下に行われる、崇高な大会である。しかし一方でオリンピックは、さまざまな問題に直面しながらその大会運営を切り抜けてきた。とりわけ国際政治情勢の影響は第一回大会から受けているものであり、時に大会自体を大きく揺るがすものであった。オリンピックといえども、現実の国際政治構造の枠外でその理想を達成するのは不可能である。

では、そのように国際社会の枠組みの渦中で揉まれてきたオリンピックを、メディアはどのように報道し続けたのであろうか。時代を経るごとに、メディアの役割やオリンピックとメディアの関係は変化を遂げている。そのような時代の潮流の中で、“メディアが映し出すオリンピック”にも変容が生じているのではないかと考えた。そこで、1960年代、1980年代、2000年代の各年代から一大会をピックアップし、それぞれのオリンピック競技大会の朝日新聞における報道内容を分析、その変容を見出した。

### 【分析】

1960年代では、オリンピックを構成する儀式的要素（聖火リレー、五輪マーク、国旗掲揚など）に関する報道が多くなされ、日の丸を意識的に映すことで国民に対して国威発揚を行い、また国別対抗の戦いの場であることを意識させるものだった。しかし、1980年代ではそれらの特徴が薄れており、時代を経るごとに、「世界中の一流アスリートが集い、頂点を決する大会」

としてオリンピックが表象されている。

また開会式の報道を見ると、1960年代の東京大会では人々を“集団”、言い換えれば国単位でとらえたものであり、中で実際に式を執り行っているはずの“人”の存在がほとんど見えてこない。しかし、1980年代のソウル大会では、開会式に参加し、儀式的な行為を執り行う“人”に焦点が当てられるようになっている。2000年代の北京大会では、開会式を扱った記事でも選手の競技面での活躍を期待する内容に変わり、“競技者”としての姿が映し出されるようになっている。

新聞報道においてオリンピックという大会は「国別対抗／国威発揚の儀式的行事から巨大スポーツイベントへ」そこで活躍する選手は「国家を背負う国の代表からアスリートへ」と変化しているのである。

### 【結論】

上記のような変化は、グローバル化や商業化の余波によるところが大きい。グローバル化により、国威発揚という意味で国別対抗といった意識を大衆に喚起するという行為は意味をなさなくなり、また選手はスポーツに浸透した商業化により、「国の代表」としてではなく、有名スポーツメーカーと契約を交わした「世界的な有名選手」としての姿がメディアを介して人々に認知されるようになった。

しかし、広告塔と化した選手を映し、さらにオリンピックの儀式的要素に対するメディアの興味・関心が薄れていることで、メディアに映

るオリンピックは、他の世界大会と同じような、ただのスポーツイベントのような印象すら受ける。これでは、クーベルタンがオリンピックに託した本来の理念が意味を成さないのではないか。ゲートキーパーの選択次第で、オリンピック報道は大きく変わる余地がある。メディアの情報が広域な公衆に対して責任を持つとされるいま、マス・メディアこそがオリンピック・ムーブメントの推進を先導する存在であるべきである。